

空



2011・2

**SORA** 35号

# 繭玉

柴田 佐知子

輪飾の楫飛ばす灘の風

一族を見上げてばかり春著の子

繭玉の触れたるのみに母揺らぐ

川波は白き布なり初芝居

安心の底に埋もれて寒鯉は

—「俳句」一月号より—

死ぬまでと誓ひて淡くなり霜夜

介護の手また洗ひをるクリスマス

厚着の子涙を横に拭ひけり

初がすみ父も柱も動かざる

はじめより歪みてゐたる鏡餅



おほかたは忘れし父に屠蘇をつぐ

土蜘蛛は討たれてばかり読始

海神に射初の音のとどきけり

破魔矢立て歩めば山河従ひぬ

はづみても土の色なり初雀

宝船脚衰へし父に敷く

手をひろげ見せ合つてゐる春著の子

はつきりと言へぬ子の手に独楽を置く

寒満月自決の刃先思ふべし

揚げられて花のごとしや鬼虎魚

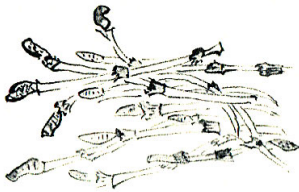
寒鯉の池動かして現るる

湯槽まで手摺めぐらせ春を待つ

## 動かぬ水

高倉和子

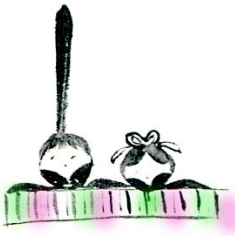
着ぶくれの母のまはりに物いろいろ  
裏返る形で倒れ破れ蓮  
破れ蓮の動かぬ水となりにけり  
吊橋の真中の風や十二月  
長生きを詫びたる父や屠蘇祝ふ  
単線の両側に雪残りけり  
母に聞く昔の暮し女正月  
山褰の尖りてきたる寒波かな  
厚着して素通りしたる恋もまた  
豆撒きの一人はすでに飽きてをり



# 砂時計

中田みなみ

年用意犬の床屋に予約入れ  
十二月軀のうちにある砂時計  
杯を唇にし眺め初衣桁  
久々に衣擦れを聞く御慶かな  
珍しく父が見送る春着の娘  
ちやんちやんこ老い手作りの味噌の香す  
焼諸屋路地あたたために来たりけり  
笹鳴や影うつくしく籠編めり  
枯並木ばかり描きをる無精髭  
木々枯れてまた青年が村を出づ



## 被爆マリア

荒井千佐代

小雪や出船の笛の峰越えて  
月夜間のをとこが棕櫚を剥ぎにけり  
胴残る被爆灯台冬銀河  
海沿ひの一本道をクリスマス  
聖夜ミサ闇に轍のかたくあり  
聖樹の星へみどりごを差し上ぐる  
礁ひとつ波に攻められ小晦日  
大年のちちははの木を巡りけり  
糠雨を駆けきて納めミサを弾く  
凍て兆す被爆マリアの眼窩にも



# 例大祭

服部早苗

太鼓橋晴れの朱さや七五三

秋の夜やうらのつかさの話など

寿老人あたりの石路の花盛り

狐火やこれより江戸へ約十里

見頃過ぎと貼られてゐたり冬紅葉

例大祭わたぬいて猪吊るす店

銀杏落葉なだれ落ちとふ一夜あり

綿虫のふはと秩父の単線路

寒禽やポストに隠す家の鍵

皇帝ダリアいぶかる顔を見おろす冬



## 初景色

銀杏ちる里のくらしを知りつくし  
子が掘つて切り疵多きさつま藪  
灘風にのりて武の神還られし  
地獄絵の極彩色に年つまる  
冬ざれの端まで嬰が畳這ふ  
歳問へば指で答ふるお正月  
杖の歩の門までといふ初景色  
父に袖あづけて歩む春著の子  
大岩に杖立てかけて寒行者  
手を拍つて筋を誘ふ寒日和



柴田志津子



## 焚火

はじまりの始めの杭を鴨の海  
なかなかのものその菊の活けやうも  
身に入むや喪服の赤き定期入  
掃いてから行けと落葉の通せん坊  
飛び下がる焚火の竹の爆ぜるたび  
目分量ぴつたり枡の新小豆  
鶴くるきのふもけふもととひも  
食みこぼす夫をちらりと零余子飯  
目標をまた立て直す山河枯れ  
あやまちの始めは知らず去年今年



だいじみどり

お年玉

秋 千 晴

埋み火

宮井 知英

清め酒風に飛ばされ漁始

お年玉貰ふ時みな良い子かな

勝ち独楽を宝のやうに持ち帰る

猪肉の分配に犬加はりし

裸木の毛細血管あらはなり

冬晴や炭坑王の床柱

艶々の林檎に毒のありさうな

浜焼きの弾ける音や冬ぬくし

湾刃のたればの北に灘あり十二月

埋み火や句心てふは恋心

寒の水火伏せの神に奉る

凍蝶の吹かれて少し傾ぎけり

姿見の中へ手招く雪女郎

小面と般若は表裏冬の薔薇

葛藤の後の諦観日脚伸ぶ

目玉より崩れてきたる雪だるま

# 白鳥

あさなが捷

# 根深汁

大地真理

怒りゐる形に滝の凍りたる

淵に潜む竜の尻尾に躓きぬ

白鳥の脚を揃へて下りて来し

秋日背にリハビリの影伸ぶ縮む

白鳥の羽根きしませて飛び立てり

傷癒えてひとりて遠出小鳥来る

オリオンや漢字の多き賢治集

大噓して院長の現るる

白鳥の首をたたみて闇に浮く

病窓の二枚の世界冬の月

毛糸編むをんななかなか譲らざり

武士の出といふも足軽根深汁

何ごとも母はうべなひ冬日向

雪女沈むも水輪なかりけり

雪解けの音重なりて押し寄する

古民家の千本格子日脚伸ぶ